

徒歩圏内の新たなるコミュニティ ふれあいの居場所づくり「近隣大家族」の試み

NPO法人 ジャンケンボン

NPO法人ジャンケンボンは、「子どもも高齢者も障がい者も誰もが地域で住み続けることができ、安心して暮らせるコミュニティづくり」を理念に平成11年より高崎市旧群馬町を拠点に活動している。地域で生活する認知症高齢者の支援など介護保険事業を法人運営の基盤とする一方で、既存の制度では対応できないニーズに応える支援システムの構築の為、地域通貨による住民相互扶助、福祉有償運送、配食による安否確認、地域で認知症の人を支える啓蒙活動などのインフォーマルサービスの開発と実践に取り組んでいる。

平成23年2月からは郵便局隣の空き店舗を改修した、ふれあいの居場所「近隣大家族」オープンし、現在2年目を迎えた。近隣大家族の目的は“居場所”を中心に地域の人々の関係性の構築である。ジャンケンボンの考える“居場所”とはその人が能力を発揮できる場所と時間、そして人との結びつきのことである。現状の近隣大家族では、コーヒーやケーキなどを用意し、いつでも誰でも気軽に茶飲みにふらっと寄れる空間になっている。また、野菜朝市や編み物教室、囲碁将棋、マージャン、歌声喫茶など住民主体のイベントが日常的に開催され、人々がそこに関心を持ち、訪れ、交流する為の仕掛けづくりをしている。



近隣大家族の第一原則は「来た人は誰も排除しないこと」である。訪れる人々は、高齢者、障害者、退職者層、主婦層、子育て中ママと乳幼児、大学生、小学生など多種多様であり、目的も様々であるが、そこに訪れる事によって誰かとふれあう点で共通する。「無縁社会」といわれる今日において、所謂社会的弱者もそうでない人も全く同じ地域の一員として、日常のふれあいの機会を共有し、居場所と役割を見つけ、関係性を構築する所が近隣大家族である。

夕方毎日、立ち寄る男性は、福祉作業所で働く身体障害者である。彼にとって近隣大家族は日常のなかでごく自然に地域の人々とふれあえる居場所となっているし、同じくこの地域に暮らす福島原発避難民にとって交流、相談の場にもなっている。今年に入り、引きこもりがちな高齢者を近隣大家族に自主的に送迎するボランティアも現れ出した。

近隣大家族は、障害や何らかのハンディの有無などに問らず誰もが地域で住み続けることができる関係性構築を目指し、これからもその試みを続ける。

